

令和3年度病害虫発生予報第3号

令和3年5月19日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病（葉いもち）	平年並	平年並
		縞葉枯病（ヒメトビウンカ）	平年並	平年並
		イネミズゾウムシ	平年並	平年並
果樹	ナシ	黒斑病	やや早い	平年並
		黒星病	やや早い	やや多い
		ハダニ類	やや早い	平年並
		ニセナシサビダニ	平年並	平年並
		アブラムシ類	やや早い	平年並
	果樹共通	カメムシ類	平年並	やや多い
野菜	スイカ	菌核病	平年並	平年並
		つる枯病	平年並	やや多い
		うどんこ病	平年並	平年並
		アブラムシ類	平年並	平年並
		ハダニ類	平年並	平年並
	ネギ	べと病	平年並	平年並
	ブロッコリー	コナガ	平年並	平年並

気象予報（抜粋）

1か月予報（5月15日～6月14日：5月13日、広島地方気象台発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。

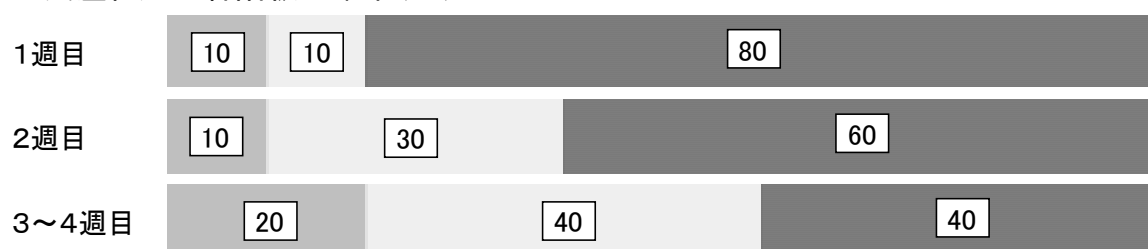
3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



凡例： 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

<気温経過の各階級の確率(%)>



凡例： 低い 平年並 高い

普通作物

[イ ネ]

1 いもち病（葉いもち）

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

（2）予報の根拠

ア 5月17日現在、苗いもちの発生は確認されていない。しかし、向こう1か月の気象予報によると、平均気温が高いことが予想されており、苗いもちの発生に好適である。

イ 長期効果持続型の育苗箱施用剤が広く普及している。

ウ 向こう3か月の気象予報によると、6月は平年に比べ曇りや雨の日が多く、7月の前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いと予想されており、葉いもちの発生に好適である。一方、7月の後半は平年に比べ晴れの日が多いと予想されており、葉いもちの発生を助長しない。以上のことから葉いもちの発生時期及び発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 苗いもちは急激にまん延するため、発生がみられた場合は直ちに葉いもち防除用粉剤又は水和剤を散布し、その後は病勢に応じて追加防除を行う。使用薬剤については、病害虫防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤を使用する場合は、使用時期及び使用量を守って均一に散布する。

ウ 山間部などのいもち病の常発地では、育苗箱施用剤を使用しても十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の見回りなどを行い、早期発見に努める。

エ 補植用置き苗は本田における発生源となることが多いため、補植後の残り苗は速やかに処分する。

オ 平成30年からストロビルリン系薬剤耐性菌の広域発生がみられなかった地域では、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の再使用が可能である。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。

2 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平年並
発生量	平年並

（2）予報の根拠

ア これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、本病の病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカの発生時期は平年並と予想される。

イ 前年の縞葉枯病の発生は平年並であった。

ウ 前年のヒメトビウンカの発生はやや多く、本種の越冬量はやや多いと見込まれる。

エ 本種に有効な育苗箱施用剤が広域で普及している。

（3）防除上注意すべき事項

ア 病害虫防除指針等を参考にして、ヒメトビウンカに対して登録のある育苗箱施用剤を使用して防除を行う。

イ 前年、縞葉枯病が多発した地域では、ピメトロジン剤またはトリフルメゾピリム剤を含有した育苗箱施用剤を使用してヒメトビウンカの防除を行う。

3 イネミズゾウムシ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月17日現在、予察灯への誘殺は確認されていない。

イ 5月14日現在、県東部の早期田植ほ場（4月下旬植）への侵入は認められているが、被害は軽微である。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、水田侵入盛期は平年並（中～平坦地：5月第4半旬、山間地：5月第6半旬）と予想される。

エ 前年の第1世代成虫の発生量は平年並であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗箱施用剤の防除効果が高いので、使用時期及び使用量を守って1箱ずつ均一に薬剤を散布する。使用薬剤については病虫害防除指針等を参考にする。

イ 育苗箱施用剤による防除を行っていても本田での食害が急増する場合には、病虫害防除指針等を参考にして、追加防除を行う。

ウ 直播栽培等の育苗箱施用剤を使用していない水田において、被害葉が顕著に増加し、成虫密度が1株当たり0.5頭以上になった場合は、病虫害防除指針等を参考にして、粒剤等で防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場において5月第2半旬に、*Alternaria*属菌の孢子飛散数が増加した。

イ 令和2年12月に行った越冬菌密度調査の結果、短果枝の病芽率、一年枝の枝病斑数は平年並であった。

ウ 4月中～下旬に行った県内巡回調査（ポリ袋検定）の結果、平均発病果率は平年に比べてやや低かった。

エ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 今後、気温の上昇とともに孢子飛散数の増加が予想される。特に、降雨の1～3日後は孢子飛散数が増加するため、降雨前の薬剤防除を徹底する。

イ 薬剤は、有機銅水和剤（キノンドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍液、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックフロアブル）500倍とポリオキシゲンAL水和剤1,500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液などを散布する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場における5月上旬の分生子飛散数は、平年に比べて多い傾向であった。

イ 5月上～中旬に行った県内巡回調査の結果、平均発病果率は1.3%（平年：0.7%）と平年に比べてやや高く、平均発病葉率は0.2%（平年：0.3%）と平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病した幼果や葉は取り除き、園外に持ち出し処分する。

イ 薬剤は、チウラム水和剤（トレノックスフロアブル又はチオノックスフロアブル）500倍液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ベルコートフロアブル1，500倍液、オキシラン水和剤600倍液などを散布する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア クワオオハダニの越冬卵のふ化最盛日は、平年に比べて11日早い4月14日（平年：4月25日）であった。

イ 5月中旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）においてハダニ類の発生は認められていない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや早く、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ハダニ類の発生園では、カネマイトフロアブル1，500倍液、モベントフロアブル2，000倍液などを散布する。

4 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月中旬現在、県予察ほ場（殺ダニ剤無散布）におけるニセナシサビダニの新梢先端葉1枚当たりの寄生個体数は2.8頭（平年：8.4頭）で、平年並となっている。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生最盛期は6月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 第1回目の防除は5月15日～20日頃、第2回目の防除は6月上旬頃を目安に実施する。

イ 薬剤はモベントフロアブル2，000倍液、ハチハチフロアブル2，000倍液などを使用し、ニセナシサビダニが寄生している新梢先端部に薬液が十分付着するように散布する。

5 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場（園芸試験場、殺虫剤無散布体系）におけるユキヤナギアブラム

シの発生は、平年並の5月第2半旬（平年：5月第2半旬）に認められた。

イ 5月第3半旬現在、県予察ほ場（殺虫剤無散布体系）におけるアブラムシ類の発生量は平年並から平年に比べてやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、アブラムシ類の第1回目の発生盛期は平年に比べてやや早い5月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アブラムシ類の発生園では、アドマイヤーフロアブル5, 000倍液、ウララDF4, 000倍液、モベントフロアブル2, 000倍液などを散布する。

イ アドマイヤーフロアブルなどのネオニコチノイド系殺虫剤の使用にあたっては、連用による薬剤抵抗性の発達を避けるため、最小限の使用とする。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月第3半旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）の集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数は平年に比べてやや多い。

イ 5月第3半旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）の予察灯におけるカメムシ類の誘殺数は平年に比べてやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、カメムシ類の発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の発生が認められるナシ園では、ジノテフラン水溶剤（アルバリオン又はスタークル顆粒水溶剤）2, 000倍液などを散布する。

イ ナシ以外の樹種では、各地域の防除暦等を参考に薬剤防除を行う。

野 菜

[スイカ]

1 菌核病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は気温15～20℃程度で多湿条件が続くと発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。マルチ上にたまった水は適宜、穴を開けて排水する。また、咲き終わった花卉は発病しやすいので、摘み取って除去する。

イ 薬剤は、ベルコート水和剤1, 000倍液、カンタスドライフロアブル1, 000～1, 500倍液、ロブラール水和剤1, 000倍液、パレード20フロアブル2, 000倍液、スクレアフロアブル2, 000倍液などを散布する。

2 つる枯病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場における本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨や過湿によって発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスやトンネル内が過湿にならないよう適度に換気を行う。

イ 本病は、株元や雨滴のあたる箇所から発病しやすいので、薬剤散布は株元にも薬液が付着するように丁寧に行う。

ウ 薬剤は、ジマンダイセン水和剤600倍液、アントラコール顆粒水和剤600倍液、ダコニール1000の1,000倍液などを散布する。

3 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は、25℃前後の気温と適度な湿度で発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本病は、収穫期の草勢低下により発生が多くなるので、初期防除を徹底する。

イ 発生前には、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。

ウ 既に発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤3,000～5,000倍液、プロパティフロアブル3,000～4,000倍液、ショウチノスケフロアブル2,000倍液などを散布する。

エ つる枯病が同時に発生している場合には、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場（園芸試験場露地ほ場）における有翅アブラムシ類の黄色水盤への飛来量は平年並である。

イ 5月上旬現在、現地調査ほ場において、アブラムシ類の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には防虫ネット被覆を行い、アブラムシ類の侵入防止に努める。

イ 発生初期の防除に努める。ハウス栽培では、着果後にチェス顆粒水和剤5,000倍液などを散布し、その後発生した場合にはモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液などを散布する。

ウ トンネル栽培では、つる引き誘引時期にチェス顆粒水和剤5,000倍液、交配前にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍液、着果後にウララDF2,000倍液などを散布する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、現地調査ほ場及び県予察ほ場（園芸試験場露地ほ場）において、ハダニ類の発生は認められていない。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にバロックフロアブル2,000倍液などを散布する。その後発生がみられた場合はマイトコーネフロアブル1,000倍液、ダニサラバフロアブル1,000倍液、グレーシア乳剤2,000倍液などを、多発した場合にはコロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。

[ネギ]

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県西部の現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は、15～20℃程度の気温で降雨が続くと発病が増加する。向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病後のまん延が早いため、発病前からの防除に努める。

イ マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤600倍液、ペンコゼブフロアブル600倍液など）、ランマンフロアブル2,000倍液、アリエッティ水和剤800倍液、ダイナモ顆粒水和剤2,000倍液などを予防散布する。

ウ 発病を認めたら、直ちにリドミルゴールドMZ1,000倍液、フォリオゴールド800～1,000倍液、レーバスフロアブル2,000倍液、プロポーズ顆粒水和剤1,000倍液、メジャーフロアブル2,000倍液、フェスティバルC水和剤1,000倍液、シグナムWDG1,500倍液などを散布する。

エ 同一成分を含む薬剤は連用しない。また、成分ごとの総使用回数に注意して薬剤を選定する。

[ブロッコリー]

1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月上旬現在、県予察ほ場（園芸試験場露地ほ場）及び現地ほ場におけるフェロモントラップの誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫の発生がみられる場合、ディアナSC2,500～5,000倍液、グレーシア乳剤2,000～3,000倍液、フローバックDF1,000～2,000倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導等に際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>



ホームページ2次元コード

病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果(ナシのシンクイムシ類)などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係：〒680-1142 鳥取市橋本 260
鳥取県病害虫防除所
(TEL：0857-53-1345、E-mail：boujyot@titan.ocn.ne.jp)
もしくは
鳥取県農業試験場環境研究室
(TEL：0857-53-0721、FAX：0857-53-0723)

果樹・野菜・花き関係
〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048
鳥取県園芸試験場環境研究室
(TEL：0858-37-4211、FAX：0858-37-4822)

※ 予報第4号の発表は、6月2日(水)の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、ご注意ください。